戦争に協力しない！させない！

練馬アクション

Web 版第６号　2025 年10月１日号



文:トッケビプンムル
絵:渡辺つむぎ
荒川河川敷で行われている韓国・朝鮮人犠牲者追悼式のフィナーレを飾るプンムルが絵本になった！（1600 円+税）

【巻頭言】トランプ来日—新首相・天皇会談に反対しよう！

■トランプ米大統領が韓国で開催されるAPECに参加する前に、ASEAN関連会議を経て、来日すると言う。

■トランプは、ロシア寄りのウクライナ戦争「和平」仲介から一転、インドとの関係悪化につながったロシア石油輸入国への制裁に加え、ウクライナによるクリミアも含む「全土奪還」の可能性を語るようになった。ロシアの燃料不足、石油価格低迷による財政赤字の拡大している。だからと言って、ロシアがすぐにも折れるわけではない。意に従わない者に対して最終的には力の行使しかなす術を知らない・なす術のないトランプ政権は、力の対決しか手がないのだ。ウクライナを矢面に、対峙正面にはEUを押し出す対ロ弱体化戦争はまだまだ続く。

イスラエルは野放しだ。ハマス幹部を狙い、カタールまで攻撃した。あくまでハマス殲滅だ。トランプは、ガザに関して、トルコやエジプトなどイスラム圏8カ国首脳と「ハマスを排除した形で統治メカニズムを構築し、アラブ・イスラム諸国が資金援助や治安部隊の展開を通じて支援するとの内容で、ガザ統治にはパレスチナ自治政府も関与し、治安部隊にはパレスチナ人も参加する」ことで合意した。アラブ諸国は、トランプが西岸併合を認めないと明言したため、提案を支持したという。アラブ諸国の面子を立てたものの、イスラエルによる西岸での入植地拡大を止める実効性はなく、“ハマス排除”についてアラブ諸国との合意を明確に取り付けた、いわばイスラエルへの側面支援と言えよう。トルコ、イスラエルには対立の種が潜在的に存在するが、クルド叩きとパレスチナ叩きのバーターが暗黙の了解となっているだろう。エジプトはひたすらパレスチナ難民の流入を恐れ、サウジはカタールが攻撃されたことを密かに喜んでいるのかもしれない。英仏加豪などはパレスチナ国家承認に転じたが、経済制裁に踏む込むわけではなく、イスラエルを制動する力にはならない。イランに対しては、英仏独はアメリカの代役核合意を迫り、国連制裁の復活を突きつけた。イランはそれに応じず、アメリカとの対話を「無益」としている。イスラエル、アメリカの再攻撃もなくはない。

APEC に際する米中首脳会談に期待を寄せる人もいる。さらには米朝対話の可能性を未だ語る人もいる。だが、結局“力勝負”に帰結するのが「戦略」の名に値しない“トランプの世界戦略”だ。

■トランプを迎えることになる日本では、自民党総裁選という「私集団の私闘」によって国会が機能していない。だが行政府は粛々と政策を進めている。9月12日には、対ロ追加制裁を決めた。パレスチナ国家の承認すら見送り、イスラエル製兵器購入の動きも続けている。日米、日米韓、日米豪といった軍事演習が目白押しで展開され、反対運動を防衛大臣が非難するに至っている。入管庁は参政党躍進に先駆けて「不法滞在者ゼロプラン」を開始し、7月から（多分、トルコ政府との調整をした上で）クルド人を主な標的とした強制送還を強行している。総裁候補は、参政党にあやかれと、外国人規制を競っている。独立志向の強い台湾の指導者と関係を持つ候補者も多い。経済安保推進でもほぼ全員が一致している。誰が新首相になろうと、軍事・経済の安保、外国人規制は臨時国会の争点とならず、物価高対策が急務との理由で一部野党も巻き込む形で補正予算の早期成立が図られよう（成立を遅らせるとの非難を浴びること避けたい野党も給付か減税かでも徹底抗戦は難しい）。この構図は、2026年度予算審議でも変わるまい。補正でも本予算でも、大軍拡予算は聖域化されかねない。

年明け解散説もあるが、年度内次年度予算成立後の解散説の方が有力だ。総選挙が遅れれば新首相へのご祝儀相場は期待できないので、解散見送りも考えられる。そうなれば通常国会には、スパイ防止法が上程されかねない。総裁候補の誰もが掲げる外国人規制は、スパイ防止法につながっている。自民党政調は、既に5月に制定を求めている。背後には、国家安全保障官邸官僚が存在することは確実だ。国民民主は維新も巻き込んでスパイ防止法の制定を進めようとしている。“平素からの戦時体制”創りは新たなステージに入るだろう。

■関税戦争と“力勝負”で世界を混乱させるトランプとそれと同調する差別排外主義者であり、軍拡と“平素からの戦時体制”創りの推進者の役割を果たす新首相とが会談するというわけだ。トランプと天皇との会談にも注意を払う必要もある。それは、“戦後80年”の節目に過去の日米戦争を「清算」し、“日米共同戦争”に向けて“日日米友好”を謳いあげる皇室外交である。トランプ来日ートランプと新首相の会談、そしてトランプと天皇の会談に反対の声をあげていこう！



2019年来日時のトランプ・天皇会談

【活動日誌】

9月1日

・関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式。ヘイト集団「そよ風」は対抗集会をせず。三々五々追悼式に潜入するなどの嫌がらせ行為をすることが予想され、その警備に参加したが、それもなし。このヘイトの動きをどうとらえるのか、分析の必要あり。

・辺野古新基地建設の強行を許さない！防衛省抗議・申し入れ行動　主催:辺野古への基地建設を許さない実行委員会

9月6日　関東大震災102周年　韓国・朝鮮人犠牲者追悼式

9月7日　どうなっているの？　辺野古の<現場>　辺野古に行こう9・7集会
　主催:辺野古の海を埋めるな！首都圏連絡会／辺野古への基地建設を許さない実行委員会

9月8日　練馬アクション定例学習会　※次回は10月6日(月)。詳しくは【集会案内】をご覧ください。
　"戦後80年"天皇・長崎「慰霊の旅」を前にして　原爆の日を振り返る　9・8学習会
　報告:福島原水禁大会(7・26)、広島(8・6)、長崎(8・9)を訪ねた練馬の仲間他
　※福島、広島については前号の報告をお読みください。長崎報告は、後の頁の〔報告1〕をお読みください。

9月9日　読書会in藍苑　佐原徹哉さん『極右インターナショナリズムの時代』(討論内容は〔報告2〕参照)
　※次回の読書会は10月30日(木)19:00
　　読むのは大野光明・小杉亮子・松井隆志編『社会運動史研究6　闘う1980年代』
　　編者の松井さんも参加【集会案内】に掲載
　　詳しくは、090－5208－5803(池田)にご連絡ください

9月12日　韓国オプティカルハイテック闘争勝利をめざす9.12集会
　主催:韓国オプティカルハイテック労組を支援する会

9月13日

・大軍拡と基地強化にNO！軍事費GDP比3・5%～5%への引き上げを許すな！9・13概算要求分析会
　主催:大軍拡と基地強化にNO!アクション2025　※申し入れ書は後の頁の〔資料2〕をお読みください。

・琉球弧を戦場に想定した日米共同演習　レゾリュート・ドラゴンに抗議する！9・13防衛省緊急行動
　呼びかけ:トランプ来日・石破＆天皇会談反対実

9月20日　朝鮮戦争停戦70年に際し南朝鮮で制作されたドキュメンタリー映画(韓国の金哲民さん監督)
　　WARmericaの運命1・2　一挙上映！！　主催:トランプ来日・石破＆天皇会談反対実

9月21日　・池袋アクション情宣　・人類の歴史と日本国憲法　兒島峰さん　主催:ねりま九条の会

9月22日　ノー・パサラン！　やつらを通すな！集中討論！参政党にどう向き合っていくのか
　　ヘイトスピーチ許さない・練馬9・22討論会

9月23日　地震の国に原発いらない　練馬でもデモ

9月24日　朝鮮学校とともに・練馬の会　結成15周年記念講演会
　講師:前田朗さん　民族教育権と将来世代の人権

9月25日　難民・移民の親と子どもの日本語教育・母語教育を考える練馬の集い
　お話　加藤みわさん(反貧困ネットワーク)
　呼びかけ　難民・移民フェス応援ねりまKeepers

9月26日　初めて「琉球人は先住民族」と認めた大阪高裁判決から2年　琉球人遺骨の返還を求める練馬の集会
　お話　與儀睦美さん(琉球人遺骨返還を求める会／関東　事務局長)
　呼びかけ　戦争に協力しない！させない！練馬アクション

9月29日　もう待てない再審法改正！北部集会　再審事件のリアルと法改正の現在地
　講師:鴨志田祐美さん　主催:部落解放同盟練馬支部他

9月30日　防衛省は概算要求を撤回しろ！許すな！過去最大の防衛費8.8兆円2026年度大軍拡予算
　　9・30防衛省行動　呼びかけ:大軍拡と基地強化にNO!アクション2025
　　※申し入れ書は後の頁の〔資料1〕をお読みください。

〔報告1〕2025 真夏の広島･長崎の旅 國島政雄さん(核･原発のない未来を子どもたちに@練馬)

1 始めに

「祈りで平和は作れない折鶴を駅頭で集めてどうするのか」・・・。昔、高校生の時、國島は思っていました。

2 動機

年齢に鑑み体力の有るうちに動けるうちに高校生の時思ったことを検証したかった。すこしお金が有るうちに動いてみたかった。昨年、高校生の時以来長崎にツアーで行ったが平和公園だけて原爆資料館には行かなかった。2022 年に練馬原水禁の広島ツアーに参加し、８・６を平和公園で過ごし、「やはり長崎も行かなければ」と思った。それらが、長崎に行こうと思った動機です。

行く気になって、半年ほど前から回りの人に誘ったが、いい返事が無かった。原水禁からも原水協からもお誘いがなかったが、脱原発運動など「私が関わる運動に役に立つ」と思ったので、一人でもいいから行く決意を固めました。

3旅行日程

8 月の 1～4 日は飯能の福島保養 PJ のキャンプへの参加と子ども子育て応援団の運転が入っていて、出発は 6 日になった。一番の繁忙期でお金が高く青春 18 切符での旅とした。5 日間 JR 普通列車乗り放題で 12500 円。

6 日、練馬駅を朝 4:37 分発の一番電車出発。その日は岡山でお泊り。7 日、岡山出雨で新幹線をひと区間乗り、広島へ。平和公園と原爆ドームを経てやっとさ九州。小倉でお泊り。8 日、小倉を朝出て長崎へ平和公園、原爆資料館、出島、長崎県立博物館を見学。夕方、佐世保へお泊り。9 日、長崎へ。原爆式典を長崎市のサテライト会場で見る。練馬区職労と一緒に参加。あわただしく、この日のお泊り博多へ。10 日、博多を朝出発。門司から在来線が雨で不通。仕方がなく新幹線で広島へ。後は在来線で姫路お泊り。11 日、姫路発東京までの切符を 10010 円で買い(もちろん在来線)、途中、大阪で弟の顔を見、名古屋まで在来線で。そこから新幹線で東京に帰ってきた。

4考えた事

やはり現場に行って見て感じることは大切。相模湖フィールドワークや福島バスツアーも。練馬でも、広島、長崎に行く人を増やしたい。組織に捕らわれずにやれないか。戦後 80 年。戦争体験者が減っていく中で、原爆と反戦・平和をつなぐ運動をどう作っていくのか、排外主義者政党が伸びる中で、皆さんと考えていきたい。

5どうするか

当面、核・原発のない未来を子どもたちに@練馬のメンバーを増やしていきたい。他団体、ヘイトスピーチ許さない・練馬や人権センター、難民・移民フェス応援ねりまKeepers、福島保養 PJ などへの働きかけを増やしたい。9 月 23 日には、「地震の国に原発いらない　練馬でもデモ」をやります。

7 おまけ

今から 53 年前、ひねた高校生が、夜行の各駅停車で朝、長崎の駅に降り立った。良い悪いは別として、私の行動はちっとも変っていない。これからも、このままの心を持って頑張っていくと考えています。

「おまけのおまけ」ですが、友部正人とゆうフォーク歌手の「にんじん」というアルバムの「長崎慕情」という歌を聞いてください。



〔報告2〕読書会 in 藍苑 佐原徹哉さん『極右インターナショナリズムの時代』報告

要約

この会議では、主に極右思想、ポピュリズム、移民政策、参政党などについての議論が行われました。会議の冒頭では、ある書籍の内容について詳細な紹介があり、その後、参加者間で様々な関連トピックについての意見交換が行われました。

最初に紹介された書籍は、ジハード主義とカウンタージハード主義、サイバー空間での極右運動、テロ事件の分析などを扱っています。書籍では、ニュージーランドのモスク襲撃事件やカリフォルニアのシナゴーグ襲撃事件など、一見無関係に見える事件の背景にある極右思想の連携について分析しています。

参加者たちは、極右思想の台頭と新自由主義経済政策との関連性、移民政策の問題点、日本の入管政策などについて議論しました。特に、日本の入管政策がヨーロッパの動向と軌を一にしていることや、「不法滞在者ゼロプラン」などの政策が持つ問題点が指摘されました。

また、現代のグローバル資本主義における国民国家の役割についても議論され、国境を越えた資本と商品の循環ネットワークにおいて、国民国家が阻害物ではなく補完物として機能していることが指摘されました。

会議の後半では、参政党の台頭現象、政治的無関心と極右ポピュリズムの関係、若者の政治参加の問題などについて意見が交わされました。参政党の憲法草案や政治手法についての批判的分析もなされ、特にその矛盾した主張や、様々な不満を持つ層に対する訴求力について議論されました。

農業や移民労働者の問題も取り上げられ、極右的な移民排斥の主張と実際の労働力需要との矛盾についても指摘がありました。

チャプター

書籍紹介:ジハード主義と極右運動の分析

話者1が書籍の内容を紹介しました。この書籍はジハード主義とムスリム諸国の低下、ボスニアでのジハード主義の形成、サイバー空間での極右運動などを分析しています。特に第三章では、ニュージーランドのモスク襲撃事件、カリフォルニアのシナゴーグ襲撃事件、テキサスのスーパーマーケット銃撃事件など、一見無関係に見える事件の背景にある極右思想の連携について詳述しています。書籍は極右思想家の分析や、極右の台頭と移民状態の関係性についても触れており、新自由主義経済政策と社会の劣化が極右台頭の真の背景であると主張しています。

入管政策と移民問題の議論 00:08:00

話者 1は日本の入管政策について言及し、「不法滞在者ゼロプラン」などの政策が進められていることを指摘しました。クルド人難民の問題や、トルコ政府と日本の関係の深さが背景にあることも説明されました。また、高度人材の獲得と研修制度の拡充がセットで進められる一方で、「払わなかった人を追い返す」という政策も打ち出されていることが批判的に述べられました。

現代資本主義論と国民国家の役割

話者 1は現代のグローバル化した資本主義における国民国家の役割について説明しました。現代の資本主義は資本と商品の国際的な循環ネットワークを基礎としており、国民国家はこのネットワークの阻害物ではなく補完物として機能していると述べられました。国民国家は資本主義の黎明期には制度提供を通じて原始的蓄積を支え、現代では国際機関と国家間システムを支える支柱として機能し続けていると説明されました。

参政党と極右思想の分析

参加者たちは参政党の思想と手法について議論しました。話者 2は参政党の主張が「支離滅裂で平気」であることを指摘し、話者 1はそれが「力を持つ」ことの腹立たしさを表明しました。参政党の憲法草案についても触れられ、「天皇がしろしめす国」という表現や近代立憲主義の理解不足が批判されました。また、参政党が文化相対主義などの概念を都合よく利用していることも指摘されました。

ポピュリズムと政治的無関心の関係

参加者たちはポピュリズムの台頭と政治的無関心の関係について議論しました。話者 3は参政党のような現象が生まれる背景として、政治的無関心があることを指摘しました。話者 4は日本ではポピュリズムが上陸しつつあるという見解を示し、歴史修正主義がすでに「勝っている」状況を指摘しました。また、自民党政権がすでに極右的であることがポピュリズムの防波堤になっている可能性や、政治的無関心の深さが極右の顕在化を防いでいる可能性についても言及されました。

陰謀論と極右思想の手法

参加者たちは陰謀論と極右思想の手法について議論しました。話者 4は陰謀論者に対しては否定しても無駄で、コミュニケーションを続けることが重要だと述べました。また、ワクチン問題などでは100%どちらが正しいとは言えない複雑さがあることも指摘されました。話者 3は極右が「権力者をいじめる」ことで大衆の溜飲を下げさせるような手法を使っていることを指摘し、子宮頸がんワクチンの問題などを例に挙げました。

若者の政治参加と投票行動

若者の政治参加と投票行動について議論されました。話者 4は学生との接触経験から、多くの若者が投票には行くものの政治的関心は低いことを指摘しました。投票行為と政治的関心が切り離されており、「投票は行くものだから行く」という感覚で投票する若者が多いことが述べられました。話者 3は過去には投票に明確な意味があったが、現在はその意味が失われており、参政党のような政党が強烈に意味を与える存在として台頭していることを指摘しました。

ネットワークビジネスと参政党の関連性

参加者たちは参政党とネットワークビジネスの関連性について議論しました。話者 2は参政党の支持基盤にネットワークビジネスの関係者が多いことを指摘し、高額なセミナーや薬事法で認められないようなサプリメントの販売などの副収入があることを述べました。また、「普通に生きていけない人たち」が参政党に引き寄せられる傾向があることも指摘されました。

農業と移民労働者の矛盾

農業と移民労働者の問題について議論されました。話者 1は地方の農業や漁業では外国人労働者がいないと成り立たない実態があることを指摘し、話者 3はこれが「移民出ていけ」と言いながらも実際には移民労働力に依存するという矛盾を生んでいると述べました。また、過去の漁村におけるフィリピン人花嫁の例なども挙げられ、政策とイデオロギーと現実のギャップが指摘されました。

（文責：A）

〔資料1〕 軍事費の過剰な増大を既成事実とする2026年度防衛省概算要求の白紙撤回を求める申し入れ

内閣総理大臣 石破茂 殿

防衛大臣 中谷元 殿

8月29日、省議決定の上公表された2026 年度防衛省概算要求は、またもや過去最大を更新する8兆8454 億円と、今年度当初予算を1450億円上回るものとなった。これに加えて、総工費の見積が青天井状態の馬毛島基地建設も含む米軍再編、SACO関連費用は例年通り金額を明示しない「事項要求」であり、経済安全保障関連費も同様である。さらに本年度当初より3千億近い増額がなされた「契約ベース」も加味するなら、野放図なまでの軍事費の増額が、国民生活を圧迫しながら今年も強制されるのである。

主な項目として、ここ数年の軍事トレンドである「スタンド・オフ・ミサイル」整備に1兆246億円、これに新たなトレンドとして無人アセットによる防衛力強化体制"SHIELD"の構築に本年度の３倍の3128 億円が計上されている。また、空自を「航空宇宙自衛隊」へと名称変更し、「宇宙作戦集団」を新編、陸自の特殊作戦群と中央即応連隊を一体で運用する「特殊作戦団」も新編。同じく陸自では、現在2300人の第15旅団を3900人の「師団」に改変、「電子戦部隊」「対空電子戦部隊」も新編するなど、ドラスティックな組織改編も目につく。

これらを単純に積算するならば、岸田政権下での単なる「数字ありき」の「GDP２%、5年間43兆円」を超える増額ペースとなる。この背景には、防衛省が設置した財界主導の「防衛力の抜本的強化に関する有識者会議」の議論と報告があることは明白である。「防衛力整備計画」の柔軟な見直しを柱に、VLS 搭載原子力潜水艦の保有すら示唆するこの会議を受け、政府内では８月に「国家防衛戦略」と「防衛力整備計画」を前倒しで改定する方向が固まっている。

しかしながら、政府防衛省の説明は千篇一律の「わが国の安全保障環境は戦後最も厳しく複雑に」のみであり、さらなる増額が見込まれている軍事費の財源確保すら、今に至るも明確にされていない。政府としての説明責任も果たさず、国民生活に直結する喫緊の政策課題を疎かにしての徒な軍事費拡大を、主権者・納税者として許容することはできない。2026年度防衛省概算要求の白紙撤回と抜本的見直しをここに強く要求する。

2025年９月30日

大軍拡と基地強化にNO！アクション2025

〔資料2〕日米共同演習「レゾリュート・ドラゴン」の中止等を求める申し入れ

石破茂　内閣総理大臣　殿
中谷元　防衛大臣　殿

９月 11 日から、日米共同演習「レゾリュート・ドラゴン」が行われている。陸上自衛隊西部方面隊、米第３海兵機動展開部隊を中心に、中部及び北部方面隊、海自、空自、米陸海空も加わり、過去最大の１万 9000 人ほどが参加する。“領域横断作戦”を演習のように遂行するための大規模な“戦争のような演習”である。

目的は、「陸上自衛隊及び米海兵隊の部隊が、それぞれの指揮系統に従い、共同して作戦を実施する際の相互連携要領を実行動により演練」し、「日米の連携強化及び共同対処能力の向上を図る」とされている。「レゾリュート・ドラゴン」は、自衛隊統合作戦司令部（市ヶ谷／3 月 24 日発足）と在日米軍政令部（赤坂プレスセンター）の連携を既成事実とし、その強化を図るものであることは明らかだ。

演習地の多くは、岩国基地以南に集中している。演目には、調整所の開設・運営、対艦戦闘、対着上陸戦闘、兵站・衛生訓練、戦闘射撃等が挙げられている。「対艦戦闘」は西太平洋へ進出する中国軍艦船を阻止する対艦ミサイル攻撃などを想定したものであり、「対着上陸戦闘」はいわゆる“離島奪還作戦”を意味する。“琉球弧を戦場と想定した演習”であることは明らかだ。にもかかわらず、沖縄県での演習については、「調整中」として秘匿し続けた。事実を知らせず、琉球弧の民衆を戦争に巻き込む体質は、沖縄戦時の旧軍と同じだ。

住民軽視は、事故続きのオスプレイを、米軍のそれは普天間基地から、自衛隊のそれは佐賀基地から、鹿屋基地に集結させ、熊本や奄美などの訓練地と行き来させることにも表れている。

石垣島では、アメリカ軍の新型兵器「ＮＭＥＳＩＳ」ー遠隔操作ができる無人の車両に射程が 180 キロを超える対艦ミサイルを積むことが可能な兵器ーが展開される。対艦ミサイル攻撃の最前線とするという想定は、「国民保護」という名の“現代版強制疎開”計画と表裏一体だ。新型兵器の実験場化は、それを先取りするものである。

徳之島の前泊漁港で米軍が ALPV（半潜水型無人艇）を使用した物資輸送訓練等をするなど、公共インフラを利用も行なう。佐世保基地で自衛隊の補給品を米軍の揚陸艦・物資支援艦艇に積み込む訓練を「役務事業者の支援」を受けて行うなど、“民間企業・民間労働者の動員”も訓練に組み込んでいる。現代版の“徴発”“徴用”だ。

8.8 兆円にのぼる 2026 年度防衛予算の概算要求には、「南西地域の島嶼部へ部隊等を輸送する海上輸送力を補完」するためにＰＦＩ船舶を確保し８隻体制にするこが盛り込まれている。“琉球弧”から湯布院など九州西部に配備することが想定される敵地先制攻撃に使用できる長射程ミサイルを含む様々な国産のスタンド・オフ・ミサイルの研究開発・量産も盛り込まれている。また、主要司令部等の地下化等（364 億円）など「強靭化」という名の「要塞化」のための予算も、防衛省は要求している。2026 年度防衛予算概算要求は、現代版の“強制疎開”・“徴発”・“徴用”を伴う“琉球弧”の先制攻撃拠点化・要塞化を推し進めるものと言わざるを得ない。加えて、米軍再編関係経費やＳＡＣＯ関係経費は、金額さえ明記しない「事項要求」としている。これは、基地建設に反する辺野古米軍新基地建設に湯水のように多額の費用を注ぎ込み続けることを意味する。

“戦争のような演習”と自衛隊軍拡、辺野古米軍新基地建設などの「米軍再編」は、戦争抑止につながらず、東アジアの緊張を激化させ、民衆の命と生活を破壊する戦争の火種をまき散らすことにしかならない。

以上から「レゾリュート・ドラゴン」及び 2026 年度防衛予算概算要求について、以下、申し入れるものである。

一、「レゾリュート・ドラゴン」での日米のオスプレイを使った訓練を中止し、以後、オスプレイの飛行停止を行い、米軍にオスプレイ部隊の撤退を求め、陸上自衛隊もオスプレイ部隊を解散すること。
一、石垣島への「ＮＭＥＳＩＳ」の展開を中止し、以後、琉球弧の島じまを新兵器の実験場にしないこと。
一、「レゾリュート・ドラゴン」での公共インフラ等の使用や民間企業・民間労働者を組み込んだ訓練をやめ、以後、そうした施設や企業・労働者の軍事利用をしないこと。
一、「レゾリュート・ドラゴン」全体を中止し、以後、琉球弧を戦場に想定した演習をやめること。
一、琉球弧を戦場に想定した日米共同作戦計画を廃棄し、それと表裏一体の「国民保護」という名の“現代版強制疎開”計画も撤廃すること。
一、在日米軍司令部の機能強化を前提とした自衛隊統合作戦司令部との連携強化をやめること。
一、沖縄県民はじめ民衆に対する情報隠しをやめること。
一、8.8 兆円にものぼる 2026 年度防衛予算概算要求に則った琉球弧の先制攻撃拠点化・要塞化をやめること。
一、辺野古米軍新基地建設を断念すること。

2025 年９月 13 日

トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会

【集会案内】

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション学習会

どうなる日本政治　自民総裁選－臨時国会－新首相指名－補正予算審議？解散総選挙？

日時:10月6日(月)　19:00　会場:サポート練馬

■戦争・治安・改憲 NO!総行動　明文改憲も実質改憲も許すな！10・9国会行動

スパイ防止法反対！　院内・院外での差別・排外主義の扇動を許さないぞ！　やめろ！難民・移民排斥
大軍拡予算反対！　琉球弧の“戦場化”を許さないぞ！
ガザ虐殺戦争2年　トランプはイスラエルを野放しにするな！　日本政府はイスラエルに加担するな！

10月9日(木)11:00～13:00　衆院第二議員会館前

■『水平へ漕ぎ出す－辺野古海上行動と裁判闘争－』上映＆辺野古の今を聞く会

10・17『水平へ漕ぎ出す』上映実行委員会　10月17日(金)開会 19 時(開場 18 時 40 分)
お話鈴木公子さん(「辺野古ぶるー」メンバー、「千葉さんの裁判を支援する会」共同代表)
文京シビック5階区民会議室 C　参加費 500 円

■「『戦時下』の宮古島から清水早子さんを迎えて」10・23行動(仮)

PartⅠ　陸上自衛隊朝霞駐屯地申し入れ行動 12:00　東武東上線朝霞駅南口ロータリー集合
PartⅡ　「『戦時下』の宮古島から清水早子さんを迎えて」10・23集い
18:10開場　18:45開始　DVD「琉球弧を戦場にするな2025」上映
会場:としま区民センター会議室503　資料代:500 円
主催:「『戦時下』の宮古島から清水早子さんを迎えて」10・23実行委員会

■外国人イジメはいやだ！差別のない社会がいい

「ヘイトスピーチ許さない・練馬」石神井公園情宣

10月25日(土)16:00～17:00(予定)　石神井公園駅ロータリー

■トランプは日本にも韓国にも来るな！

米日はガザ虐殺戦争に加担するな！10・26新宿南口情宣

煽るな！台湾危機　日米韓軍事一体化反対！　強化するな！経済安保

10 月 26 日(日)11:00～12;00　於:新宿駅南口・甲州街道

呼びかけ:トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会

■「スパイ防止法」反対集会　―　40 年前の「スパイ防止法」を検証する

◇時:10月26日(日)13:30　◇所:南部労政会館第 5 会議室　◇講師:足立昌勝さん
(関東学院大学名誉教授・刑法)
◇資料代:500 円
◇呼びかけ:破防法・組対法に反対する共同行動

■ガザ虐殺戦争開始から２年

中東と難民・移民の現在を考える

10・31練馬の集い



＜お話＞ 中東の現在　田原牧さん

【田原さんプロフィール】東京新聞論説委員兼編集委員。2014年、『ジャスミンの残り香―「アラブの春」が変えたもの』で第一二回開高健ノンフィクション賞を受賞。

イギリスとドイツのクルド人コミュニティを訪ねて　金井真紀さん



【金井さんプロフィール】文筆家・イラストレーター。著書に「世界はフムフムで満ちている」「日本に住んでる世界のひと」「テヘランのすてきな女」など。難民・移民フェス実行委員。

日時　10 月 31 日(金)　18:10 開場　18:20 開始

会場　練馬区役所本庁舎 20 階交流会場　※資料代　500 円

〔主催〕 戦争に協力しない！させない！練馬アクション 〔協力〕ヘイトスピーチ許さない・練馬

〔連絡先〕090－5208－5803(池田)

■トランプ来日反対！新首相・天皇会談反対！10・29 デモ

10 月 29 日(水)　18:30 新橋駅西口 SL 広場集合 19:00 デモ出発(予定)

主催:トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会

第 10 回ねりま沖縄映画祭 2025

10 月 11 日(土) Coconeri3階 練馬区民・産業プラザ研修室1 B 19:00 勝ちゃん──沖縄の戦後 ゲスト 影山あさ子監督
10 月 12 日(日) Coconeri3階 練馬区民・産業プラザ研修室1 19:00 勝ちゃん──沖縄の戦後 ゲスト 影山あさ子監督
10 月 13 日(月・休) 練馬区役所 地下多目的会議室 18:00 SANSHIN ～三線～ ゲスト 本間章子監督
10 月 25 日(土) Coconeri3階 練馬区民・産業プラザ研修室 18:00 SANSHIN ～三線～ ゲスト 本間章子監督
10 月 26日(日) Coconeri3階 練馬区民・産業プラザ研修室1 B 19:00 【NDU の世界】アジアはひとつ ゲスト 中村葉子さん
10 月 31 日(金) Coconeri3階 練馬区民・産業プラザ研修室1 B 18:30 遠いところ ゲスト 工藤将亮監督
※「ガザ虐殺戦争開始から２年 中東と難民・移民の現在を考える練馬の集い」と被っています。アクションとしては、この日は、田原牧さん＆金井真紀さんの話を聞きに来て下さることを切にお願いする次第です。
11 月 2 日(日) 練馬区役所 地下多目的会議室【沖縄戦 80 年 沖縄の歴史と今を見つめる】
骨を掘る男 1 回目上映 10:00 2回目上映13:00 ひめゆり戦史 いま問う、国家と教育16:00
トークセッション 7:10 奥間勝也監督 森口豁さん ナビゲーター 永田浩三さん
11 月 16 日(日) 練馬区役所 地下多目的会議室 18:00【沖縄を写しつづける 石川真生】オキナワより愛を込めて ゲスト 砂入博史監督
11 月 23 日(日)練馬区立生涯学習センターホール 19:00【NDU の世界】沖縄エロス外伝 モトシンカカランヌー ゲスト 小野沢稔彦さん
11 月 24 日(月・休) 練馬区立生涯学習センターホール 19:00【沖縄を写しつづける 石川真生】劇場が終わるとき ゲスト 真喜屋力監督

【防衛省・自衛隊動向】

８月29日

・防衛省、国産スタンド・オフ・ミサイルの早期整備等を公表。地発型の2式地対艦誘導弾能力向上型については2025 年度及び2026年度に健軍駐屯地(熊本県)に所在する第5地対艦ミサイル連隊に、2027年度に富士駐屯地(静岡県)に所在する特科教導隊に配備を行うことを予定。2028 年度以降に計画していた12式地対艦誘導弾能力向上型の艦発型及び空発型の運用開始を前倒し 2027 年度に。艦発型については、2027 年度に改修後の護衛艦「てるづき」で、空発型については百里基地(茨城県)に配備予定のF－2能力向上型で運用を予定。島嶼防衛用高速滑空弾については、富士駐屯地(静岡県)に所在する特科教導隊に配備した上で、実践的な運用の開始を2026年度から2025年度に前倒し。2026年度には、上富良野駐屯地(北海道)及びえびの駐屯地(宮崎県)に、島嶼防衛用高速滑空弾を運用する部隊を新編し、配備する予定。

・防衛省、2026 年度概算要求公表。

９月１日　9月11日から始まる自衛隊とアメリカ軍の合同訓練「レゾリュート・ドラゴン」でアメリカ軍がロケット砲ハイマースを与那国島に展開させる計画に対して、与那国町・上地町長は「報道されている(訓練の)分野については私はお断りするつもりで決心しています」と話す。

９月２日　南雲憲一郎(なぐも・けんいちろう)統合作戦司令官が、統合作戦司令部においてジム・ホッケンハル英国サイバー・特殊技能作戦コマンド司令官の表敬訪問を受け、同司令官と懇談。

９月4日　株式会社日本製鋼所の室蘭製作所において、装輪装甲車(人員輸送型)AMV の量産初号機の出荷式。

９月７日

・陸上自衛隊の輸送機・オスプレイ17 機が配備された佐賀駐屯地で開設記念式典。

・沖縄市で12～14日に開催される第70回記念沖縄全島エイサーまつり(主催・同実行委員会)に陸上自衛隊第15旅団エイサー隊が出演することが分かった。初日の12日、胡屋十字路周辺である固定演舞に出演する。市民団体が出演中止要請。

９月９日

・今年三度目の日比防衛相会談。

・防衛省・中野審議官、「ウクライナ防衛コンタクトグループ」にオンライン参加。

・防衛省、将来的に防衛分野への活用が見込める基礎研究を支援する「安全保障技術研究推進制度」について、2025 年度は過去最多の 49 件(昨年度 25 件)の研究を採択したと発表。

・発がん性の恐れ「PFAS」航空自衛隊新田原基地内外5か所で再び超過。宮崎県が継続調査の結果発表

・東京機械製作所 、注力分野である「FA(Factory Automation)事業」において、JMU ディフェンスシステムズ(京都府舞鶴市)から、防衛省向けの搬送・格納に関しての自動化・省人化装置を受注したと発表。

９月11日　日米合同演習レゾリュート・ドラゴン始まる。25 日まで。

９月14日　航空自衛隊の F15 戦闘機をイギリスやドイツ、カナダなどに派遣。戦闘機の派遣は初めて。

９月15日　日米韓合同演習フリーダム・エッジ始まる。19 日まで。昨年6月に次ぐ第2回目。

９月19日

・中谷防相、閣議後会見で日米共同訓練「レゾリュート・ドラゴン」などの自衛隊活動に「過度な抗議、妨害活動が続いている」として、「活動は自由だが、良識をもってやっていただきたい」と、抗議活動に注文をつける。

・新潟空港で航空自衛隊の救難捜索機が着陸時に滑走路を逸脱。

・海自がオーストラリア海軍と共同訓練(日豪トライデント 25-3)を実施。

・防衛力の抜本的強化について検討してきた防衛省の有識者会議が、防衛装備品の積極的な移転や「防衛力整備計画」の柔軟な見直しなどを求める報告書を取りまとめ、中谷防衛大臣に提出。長射程のミサイルを搭載し、長距離・長期間の移動ができる潜水艦を整備するため、次世代の動力を活用することの検討も含めて、必要な技術開発を行うべきだ、防衛装備品の移転を積極的に推進すべきだとして「救難」や「輸送」など 5 つの類型に限定している輸出ルールについて「国民の理解を得て移転の道を広げていくことが必要だ」といった内容。

９月20日　馬毛島自衛隊基地工事作業船と漁船が衝突―漁船は大破、乗組員１人が頭や右腕に切り傷。工事関係の船舶事故は今年４件。

【チェックポイント】スパイ防止法をめぐって

参政党が主張したことで、俄かに“スパイ防止法”が注目されるようになった。国民民主は、9月11日、ワーキングチームを立ち上げた。自党案を叩き台に維新、参政党などにも協議を呼びかける考えだ。先立つ5月28日、治安・テロ・サイバー犯罪対策調査会（会長:高市早苗）は、「諸外国と同水準のスパイ防止法の導入に向けた検討も推進すべきである」と主張する「「治安力」の強化に関する提言 ～安全・安心な日本を取り戻すために～」を石破首相に提出している。参政党が注目されるようになった参院選よりもずっと前のことだ。高市政権が成立した場合、一気にスパイ防止法制定の動きが進むということだ。高市政権でなくとも、自民党の調査会が提起したということは、早晩、法案化があり得るということでもある。裏で知恵を授け、糸を引いているのは、国家安全保障官僚どもなのだから・・・。



ところで、「スパイ防止法」と言えば、1986年に廃案になった「国家秘密法」を思い浮かべる方も多いだろう。その第四次案の正式名称は、「防衛秘密を外国に通報する行為等の防止に関する法律案」。本箱をゴソゴソ漁ってみたら、当時の中野の市民運動「国家秘密法を考える中野区民ず」編集の『国家秘密法を考える　九〇年代の予告』（八月書館、1989年。今もアマゾンで入手できることを確認！）。当時は市民運動がやった連続講座が本になって運動を広げていたりしてたんだ・・・と感慨ひとしお（僕もまだギリギリ20代だった）。「勝共連合＝統一教会の狙いと国家秘密法」なんて論考があって、今も昔も変わらぬ連中を相手にしないといけないと思うと、気が滅入る。そう言えば、当時、韓国の軍事独裁政権と親密な「親韓派」と言われていた勢力の一つが民社党・同盟だった。その流れが、国民民主・連合の重要基幹産業労組へとつながっている。

ところで、第四事案はそのタイトルにあるように対象は「防衛秘密」。これって、特定秘密保護法でできたよね！　じゃどんなものが出てくるのか。同書には加納美紀代「戦前のスパイ防止法の成立過程」が収録されおり、「「スパイ」取り締まりの立法化の過程　略年表」が付されている。その最初に出てくるのが、1899 年の軍機保護法、要塞地帯法。前者は特定秘密保護法。後者は重要土地等調査規制法。同書の資料に掲載されているのは1941年の国家保安法。それは経済に係わる「国家機密」を対象にしている。その第十条には「重要物資ノ生産又は配給ノ阻害」が出てくる。でも経済安保法もできたよね。

じゃなんだというと、第九条に「外国ト通謀シ又ハ外国ニ利益ヲ与フル目的ヲ以テ治安ヲ害スベキ事項ヲ流布シタル者ハ無期又ハ一年以上ノ懲役ニ処ス」があった。自民党の「「治安力」の強化に関する提言」は、冒頭に「外国勢力による偽情報・誤情報拡散対策」を挙げている。「スパイ防止法」が出てくるとしたら、“情報流布規制”がメインの一つに出てくることは間違いない。同提言は「外国勢力の情報工作の手段となるおそれが大きい」ものとしてSNSを挙げており、SNSを中心としたネット空間での「言論規制」が焦点になるだろう。

自民党提言は、情報収集機能の強化も提示している、「スパイ防止」の名で「スパイ機関」を創る！？　能動的サイバー防御関連法には盛り込まれなかった内閣情報調査局創設は盛り込まれるだろう。自民党提言は「仮装身分による情報収集」にまで言及しており、日本版CIAも日程に上ってこよう。

自民党提言は、「諸外国と同水準のスパイ防止法」と言っている。その点では中国のそれが参考になろう。「中国を非民主主義的専制国家だと批判し、中国の脅威に備えると言って、中国に倣ってスパイ防止法を創る」というわけだ。中国の「反スパイ法」は、2014年に制定された。2023年に三回目の「改正」が行われた。それによって「個人・企業等の組織について、反スパイ活動への支援・協力義務が追加」されたり、「スパイ活動の通報義務、通報を行った者および反スパイ活動への貢献者・組織に対する表彰・報奨、当局への通報窓口の設置」が新たに規定された。自民党提言は「対日有害活動の状況等について、地方自治体における政財界が連携した情報共有の場を設けるなどの取組を推進すべきである」としている。地方自治体・民間を「スパイ摘発」に「協力」させ「相互監視社会」を形成するのが、新版「スパイ防止法」の大きな狙いになってくるだろう。

他にも、中国では「外国組織に対する監視」も強化されおり、「外国組織」とみなした組織に対する団体規制が強化されることも考えられる。特に在日外国人の教育・文化活動は監視対象になりかねない。「スパイ防止は差別・排外主義と表裏一体」ということも忘れてはならない。

（文責:池田）

【寄稿エッセイ】ガザ虐殺戦争２年に寄せて

兒島峰

＜兒島峰さんプロフィール＞
神奈川大学経営学部准教授。メキシコ国立人類学歴史学学院、社会人類学コース終了。筑波大学人文社会科学研究科で博士号取得。著書に『アンデスの都市祭礼』(明石書店、2014 年)、共著に『アンデスで先住民の映画を撮る―ウカマウの実践 40 年と日本からの協働 20 年』(現代企画室、2000 年)などがある。ガザ虐殺戦争に反対するスタンディングを仲間と共に練馬駅街頭で展開している。

2023 年 10 月 7 日、多くのメディアが、「イスラム組織ハマスによるイスラエルへの攻撃」と報じた出来事が発生した[i]。イスラエルのネタニヤフ首相は、「ハマスによるテロはホロコースト以来の大虐殺だ」とパレスチナ・ガザ地区への攻撃を正当化しようとしたが、そのわずか一週間後の 2023 年 10 月 14 日には国連人権理事会の専門家が、イスラエル軍の行為を、パレスチナ人に対する民族浄化に相当するとして警告している[ii]。

イスラエル軍の攻撃は、国際法で禁止されている医療施設、学校、避難所を対象としている。ガザにあった 36 の病院すべて、16 大学すべてと文化センターが、早い段階でイスラエル軍によって破壊された。

これら一連の攻撃が意図するものとは、何か。

生命、そして、民族集団としての歴史、文化、アイデンティティの拠り所となるすべての根絶だ。「パレスチナ」という存在そのものを消し去ろうとしているのだ。

わたしは、当初、これほどにまで残酷で悪意に満ちたイスラエルの蛮行は、国際社会によってすぐに止められるに違いないと思っていた。

2024 年 10 月、一年経っても状況は変わらないどころか、悪化していることに、愕然とする。

そして、今。まさか二年目を迎えることになるとは…。

2017 年から 2018 年にかけて、わたしはヨルダンにいた。一人旅だった。ペトラ遺跡の現地ガイドは、物静かだが、適切な解説、そして、写真スポットをさりげなく教えてくれる親切な男性だった。長い道のりだが、嬉々として歩いていたので疲れも感じず、メイン・スポットのエル・ハズネに到着、しばし観光した後、まだ歩けそうだね、この上に修道院跡があるから、行こうか、と誘われ、さらに上った。圧倒され、立ちすくんでいると、しばらくして、こっちに来れる？と言われる。観光名所ではなさそうだが、とりあえずついていくと、はるか向こうに、ビルが整然と立ち並ぶ街並みが見えた。そして、彼は言った。「あそこは、パレスチナだ」。

後頭部を巨大なハンマーで殴られた気分、というのは、まさにこのことであろう。わたしは自分の無知ゆえの無邪気さを恥じた。

彼は、さらに、こっちにも来て、と別方向へ誘う。今度は広大な大地を指して、言う。「あそこも、パレスチナだ」。

旅の道中、死海や紅海につながるアカバでも、「我々にとって、イスラエルという地名は存在しない」と言われた。

公的な統計では明らかにされていないが、ヨルダンの 6 割から 7 割以上がパレスチナ系住民と言われているそうだ（臼杵　2024:72）[iii]。わたしにパレスチナを見せてくれた男性も、パレスチナにルーツを持つのだろうか。すぐそこに見えるのに、立ち入ることのできない故郷に向ける彼の瞳が、印象的だった。

2023 年 12 月 29 日、南アフリカが、イスラエルが「ジェノサイドの犯罪を防止し処罰する条約」に違反していると国際司法裁判所に提訴、2024 年 7 月 20 日、国際司法裁判所は、イスラエルによるパレスチナ占領政策は国際法違反であると勧告、同年 11 月 21 日には国際刑事裁判所が、「人道に対する罪と戦争犯罪」でネタニヤフに逮捕状を発行した。

イスラエルによるガザ地区への攻撃は、「人道に対する罪」なのだ。だからこそ、すべての人は、パレスチナへの連帯を示し、イスラエルによる虐殺を止めなければならない。これは、イスラエルとパレスチナの問題ではない。人類の問題なのだ。

ハマスに対して寛容すぎるとの批判を、わたしは容認しない。

第一次世界大戦後に初めて設立された「国際」組織である国際連盟は、ヨーロッパ人の民族自決は認めるが、それ以外の人々の民族自決を拒絶するという極めて人種主義的な考えのもと、委任統治という名目で非ヨーロッ

パ世界におけるヨーロッパ人の支配を正当化した。第二次世界大戦後に国際連合が設立されると、ようやく、全人類の平等と全民族の自決権が国際社会で認められたようにみえた。例外が、パレスチナである。

イスラエルは、1948 年、パレスチナ人の 4 分の 3 にあたる 75 万人以上を民族浄化して、パレスチナの地に建国された。以降、イスラエルは「自国領土の拡大」を続け、1967 年にヨルダン川西岸地区とガザ地区を占領してからもガザに対して執拗な攻撃をやめなかった。

第二次世界大戦後、植民地だった地域の多くが独立を果たした。一方、パレスチナの人々は、土地を奪われ、襲撃され続けてきた。わたしたちの無知と無関心が、長年にわたるパレスチナの破壊と無関係であるはずがない。

アフラーム・ガッザーウィーと名乗るイスラエルのパレスチナ人が書いた小説『その十月の朝に』[iv]には、次のような文章がある。「ぼくらもきっとテロリストと呼ばれるだろう。(中略)。植民地国家にとって、植民地の人間がその支配と抑圧からの解放を要求し独立を求めること、そのために闘うこと、それ自体がテロリズムだからだ」(ガッザーウィー　2024：209)。

2023 年 10 月 7 日に起こったこと、それは、イスラエルに対する反植民地闘争である。

被占領者が占領軍と闘うことは、武力行使も含めて国際法で認められている。そうでなければ、いかにして植民地の独立が可能となるというのか。

一方、イスラエル軍は、国際法を一切無視して殺戮を続けている。攻撃対象は、医療従事者、ジャーナリスト、人道支援にまで及んでいる。もちろん、国際法違反だ。ジャーナリストだけでも 200 人以上を殺害しているイスラエルは、少なくとも国際法を 200 以上も破っていることになる。36 の病院破壊と 16 の大学破壊がそれに加わり、さらに、やはり国際法で禁止されている白リン弾…。これは、肌についたら骨に達するまで体の奥に進み、肉や内臓を焼き尽くすという、その残虐さゆえに、使用が禁止されているものだ。熱いからと水をかけると、その水と反応して酷いやけどを負わすというその白リン弾を、イスラエルは、いったい何回使用したのか。

イスラエルの残虐非道な暴挙は、国際社会を脅かしている。

2024 年 10 月、イスラエルは国連平和維持軍の拠点を攻撃した。さすがに日本でも、「国際社会を敵に回す暴挙」[v]と非難の声があがった。

しかし、それから一年が経とうとしている 2025 年 9 月現在、イスラエルは、国連は、国際社会は、パレスチナは、どう変化したというのか。

2025 年 9 月 22 日、国連創設 80 周年を迎えるにあたり、グテーレス事務総長は、「国連の原則はかつてないほど攻撃にさらされている」と訴えた。

数百もの国際法に違反しても許される特権がとある国に与えられているというこの状況は、国連の存亡にかかわる危機だ。イスラエルという存在とその擁護者は、わたしたち人類が、過ちと反省を繰り返しながら築き上げてきた国際秩序そのものを破壊しようとしている。

イスラエルが行っているのは、人類に対する攻撃である。

わたしたちは、パレスチナに連帯し、イスラエルを止めなければならない。この世界を、生きるに値するものにするために。

ⅰ読売新聞オンライン版 2023 年 10 月 8 日付の記事本文は「パレスチナ自治区ガザを実効支配するイスラム主義組織ハマスは７日、数千発のロケット弾をイスラエル領内に撃ち込み、境界を越えてイスラエル南部の町に戦闘員数十人を侵入させ、銃撃戦が発生した。」と報じ（https://www.yomiuri.co.jp/world/20231007-OYT1T50201/)、NHK 国際ニュースナビ 2023 年 10 月 10 日付のタイトルは「イスラエルにイスラム組織＜ハマス＞が大規模攻撃」（https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/qa/2023/10/10/35010.html）である。なお、一年後の 2024 年 10 月 7 日、日本は外務大臣談話として「ハマス等によるイスラエルに対するテロ攻撃」を非難すると発表した（https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/pageit_000001_00018.html)。

ⅱ国連ホームページより 2023 年 10 月 14 日付声明（https://www.ohchr.org/en/press-releases/2023/10/un-expert-warns-new-instance-mass-ethnic-cleansing-palestinians-calls)。

ⅲ臼杵悠　2024「付かず離れずの関係：ヨルダンとパレスチナ問題」『現代思想』Vo.52-2、青土社、72‐78頁。

ⅳガッザーウィー、アフラーム（岡真理訳）「その十月の朝に」『現代思想』Vo.52-2、青土社、207‐212 頁。

ⅴ読売新聞 2024/10/18 付社説「国連軍への攻撃　世界を敵に回したイスラエル」（https://www.yomiuri.co.jp/editorial/20241017-OYT1T50233/)

【読書案内】 小林正弥『神社と政治』(角川新書、2016 年)

参政党「新日本憲法」(構想案)批判するためにも･･･知っておこう！ 神道系改憲論者の天皇条項改憲論

参政党の「新日本憲法」(構想案)は、以下の第一条から始まる。

第一条 日本は、天皇のしらす君民一体の国家である。

2 天皇は、国の伝統の祭祀を主宰し、国民を統合する。

3 天皇は、国民の幸せを祈る存在として侵してはならない。

この「新憲法構想案」について、近代立憲主義のイロハも踏まえない噴飯物だと一蹴するのは簡単だ。だがそうした批判に対して、「“近代立憲主義”などと言うのは、西欧近代中心主義であり、文化相対主義の立場からすればイラン・イスラム共和国憲法など各国固有の歴史と伝統に根差した価値観を背景とした憲法を持つのは当然のことだ」といった反論をしてくることが想定される。そうした反論に、同調する者が少なからず存在するのではないだろうか。予備校講師時代、人権を自らのそれでなく、「どこか遠くの可哀そうな人たちを保護する」ものだと思っている生徒たちを数多く見てきた。自分事でないから、「そういう憲法もあっていいんじゃないすか」と傍観する者も多いのではないかと思う。なにせ「各国固有の歴史と伝統に根差した価値観は大事」という刷り込みが広く浅く軽く、それゆえ根深く浸透している。力を持たないと高を括るのは危険ではないだろうか。

現に、「新憲法構想案 第一条」と同じ考えを実践している者がいる。天皇だ。ナルヒトは**「即位後朝見の儀」**で、「**国民と苦楽を共**にされながら・・・お務めに真摯に取り組ん」だアキヒトの「歩みに深く思いを致し」、「**常に国民を思い，国民に寄り添**」うと語った。これって“君民一体”じゃないの。そして、**「日本国及び日本国民統合の象徴としての責務を果たす」**と言う。「私的行為」としての**「宮中祭祀」は「国の伝統の祭祀を主宰」**しているという神道天皇教の論理に則った自己意識に基づいている。法的根拠のない「公的行為」である**“慰霊の旅(祈りの旅)”での“慰霊(祈り)”も、同じ概念**に基づいている。「私的領域」から「公共空間」に、「国の伝統の祭祀を主宰」する行為が広げられつつあるのだ。なお、**“慰霊の旅”の“旅”(巡幸)とその際に行われる各地の見学や戦没者遺族を含む様々な人々からの聴取は、「しろしめす」行為**。その**“旅”先では必ず重警備体制が敷かれる。「侵すべからず」**ってわけだ。にもかかわらず、“護憲天皇”などとアキヒトを賛美する「リベラル」までいたのだから、既に“君民一体”は既成事実！？ なら改憲の必要なしって“護憲”？ “象徴天皇制憲法”に対する“護憲”では？ なら明文化する参政党との対立軸は？

参政党の「新憲法構想案」は、**神社本庁や神道政治連盟の改憲運動の蓄積を踏まえている**ことにも要注意。その主潮は「国家神道への回帰」である。だが、神道系の改憲論論客の中には、そうでない人たちもいる。例えば、園田稔・秩父神社宮司。「象徴天皇制は占領軍の味な工夫だが、天皇は最高神官で祭司王であって祭祀によって象徴性が保たれているのだから、民主主義を継承しつつ立憲君主制という性格を明確にすべきであり、天皇の祭祀を公的なものにすべきである」と語る。小野貴嗣・小野照崎神社宮司。「今の憲法は自分のものになっていないし読みにくいからわかりやすい表現に変え、日本の文化・伝統などの「国柄」をきちんと憲法の前文に明記し、その理念の基に憲法を作り上げていくべきである。・・・政教分離自体は大事なので、戦前のような国家神道に戻すというのではなく、祭政一致の領域を明確にし、その根本だけを回復すればよい。私的なものとされている天皇祭祀を天皇がなさる祭祀として公的にし、靖国神社や伊勢神宮の祭祀の一部を公的にとし、どの神社にも参拝できるようにすればよい。政治の実権を天皇に戻すというわけではなく、それ以外は今のままでもよい」。



以上は、小林正弥の『神社と政治』に紹介されているものだ。本書には、神道の基礎知識及び神道史（第２～6 章）、神道系改憲運動（第１章&第７～9 章）が簡便にまとめられており便利。そいっても本書自体、**「公共哲学」を媒介に「日本における市民宗教の可能性」(第９章)を探り**、「神道的な政治」とは何かを「環境・平和・経済」に至る「天皇の祈り」に求め（第 10 章）、「まつりごと＝奉仕事」を「政治の理念」にすることを主張する（第 11 章）という曲者だ。「環境」（エコロジー）は参政党も強調している。それは前号で紹介した佐原徹哉さんの『極右インターナショナリズムの時代』にあるように欧米とも共通。その点で言えば、文化相対主義を使って正当性を強弁してくるかもしれない。

敵を知れば百戦危うからず。知らないで一蹴するのでなく、相手をキチンと知って対応策を考えなければ・・・・。

(文責:池田)

【自著紹介】 戦後80年・「昭和」100年 天皇制を問う 七三一部隊と松代大本営



同時代社より 定価は 2,090 円(税込)　　　　　　**堀内哲(自治体労働者・共和制研究)**

1. 映画「731」への返答

アジア太平洋戦争で細菌戦や人体実験など残虐行為をした七三一部隊が、再び世界的な注目を集めている。

中国は「抗日戦争勝利八十周年」に、七三一部隊を中国側からの視点で描いた映画を「７３１」を７月 31 日に公開しようとしたが、日本側に配慮して、9 月 18 日に日程を変えて公開することにした。

先立つこと一年前、731 部隊に少年兵として参加した清水秀夫さん(当時 94 歳)が、七十九年ぶりにハルピンの平房の 731 跡地に行き、日本の「ABC委員会」が現地に建立した追悼碑の前で謝罪した。清水さんの訪中は中国国内で大々的に報道された。しかし、中国政府は日本の報道姿勢に疑問を持ち、日本側の現地取材は共同通信社と中日(東京)新聞社の２名が同行を許可されたのみで、テレビクルーの取材は拒否した。現地訪問後の清水さんの記者会見は報道されたが、長野県を除いて扱いは小さく、日本国内でこのことを知る人は少ない。

いま、731 部隊跡地は中国政府によって管理され「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」として公開されている。そして、731 部隊跡地を世界遺産として登録しようとしている。これが実現すれば、平房の 731 部隊跡地は、ナチスがアウシュヴィッツ収容所で行なったユダヤ人大虐殺と同じく、人類の戦争犯罪として世界的に認知され、国際的に囂々たる批難を浴び、80 年の時を超えて、再び国際的に昭和天皇裕仁の戦争責任の声があがりはじめることだろう。

七三一部隊について、多くの人によって戦後 80 年かけて、ようやく全体像が明らかになってきた。最後に最大の難問、昭和天皇・裕仁の責任を明らかにする必要がある。はたして昭和天皇は 731 の犯罪をどこまで知っていたか？どこまで関与していたのか？本書では、昭和天皇と石井四郎の関わりを明らかにしていくことで推察を試みた。

2. 参政党改憲の温床となった憲法第一条「総意」

2025 年は 1945 年の太平洋戦争終結から 80 年、元号で言えば昭和から 100 年を迎える。今「新しい戦前が始まった」ことに異論はない。しかし、その原因究明のためには憲法九条の視点に留まらず、第１章の天皇制を基軸に考えることが不可欠ではないだろうか。そして「昭和」という天皇制の時間軸そのものから批判していく必要がある。

折しも参政党は独自に天皇を「国体」にし自衛軍の創出を明記した改憲案を発表した。彼らが出てきた背景には、戦後、天皇主権から象徴天皇制に替わってから、護憲派が 80 年間、天皇条項を不問にしてきたことで、象徴天皇の権威が逆に高まり、戦前のように自衛隊との一体化が進行してきたことが指摘できる。温床となったのは憲法第一条「天皇は国民の総意」が勝手に決められてしまったことだ。天皇制の行く末に危機を抱いた麻生は皇室増員を画策しているが。これは憲法十四条の平等原理にもとる。参政党や麻生らが画策する天皇制強化をやめさせるためには憲法十四条をもって一条を貫くしかない。

3. 保阪正康に真っ向から挑戦

> **目次と執筆者**　石井四郎と昭和天皇　堀内哲／「無駄な穴」と天皇制―「松代大本営」とは何か　原昭己／民族差別と天皇制―「群馬の森」朝鮮人労働者追悼碑撤去問題を手がかりとして―　髙橋夏未／普通選挙法と治安維持法から　00 年　田中久雄／戦後 80 年、昭和 100 年、天皇制を問う座談会　としまる（小倉利丸）/池田五律/金 靖郎/金澤 玲/佐藤達哉/堀内哲

2024 年 10 月の総選挙で自民党は敗北して議席を減らした。イエ制度と男系天皇をめぐって、従来通り維持したい保守勢力が優柔不断な自民党に愛想を尽かして危機感を募らせ、参政党や保守党へ投票したことが自民党の敗因の一つだ。

とまれ明文改憲の動きは一定、頓挫した。むしろ、これを奇貨として、戦後 80 年・「昭和」100 年の今、あらためて憲法第一条削除を提起したい。

本書では、世代を超えて、学生・若年層と「オールド世代」の天皇制についての討議を収録した。ネットでは見られない、長野の松代大本営と裕仁の関わりや、長野を中心とした本土決戦マップ、日本の米生産 100 年の表など貴重な資料も掲載しました。被害意識が中心の戦後 80 年企画とは距離を置き、保阪正康に真っ向から挑戦を挑んだ本作を、是非ご一読ください！

【雑誌漁り読み】『文藝』2025 年秋　特集:戦争、物語る傷跡

『文藝』2025空　特集:戦争、物語る傷跡目次

文芸雑誌が「戦争」の特集をする、それも“戦後 80 年”にとなれば、梅崎春生『桜島』、島尾敏雄『出発は遂に訪れず』、大岡昇平『野火』・・・なんていった高校の国語便覧に付いていた文学史年表に出ていた作品などが取り上げられているのではないかなんて考えるのは、1960 年生まれの爺の錆びた記憶のなせるもののようだ。

「父の傷、私の傷」は、アイヌ差別の傷が父を「アイヌとして、先祖の待つ国へ送り出すことでできた。そう思えた時に、私の傷の一つがようやく傷跡となった」と記す。

そう先住民への抑圧・差別も“戦争”なのだ。

「傷跡をまなざすための読書」は、性暴力被害の「傷の回復」過程における読書経験ノートだ。その中で斎藤は、「言葉が奪われた状態」の「本質」をフランツ・ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』に「読んだ」と述べている。その記述から、植民地支配の被害者が置きこまれた状態と、戦争につきものでもある性暴力の被害者が置かれる状態が通じていることにハッとさせられた。

「被害と傷、そしてトラウマ」は言う。「暴力はあらゆる場面で犯罪とされるが、司法の及ばない世界、つまり無法地帯がある。それが家族と国家だ。前者における暴力はDVや虐待を表し、後者は戦争を表す。力で圧倒する加害によって被害が生じるとすれば、家族と国家における被害の自覚は隠された暴力（加害）の告発につながり、じつに政治的な意味を持つことがわかる。／だからこそ、被害は、時に無視され、隠蔽され、否定されてきた。時には被害を訴える人が「間違っている」「正常ではない」「病気である」とされてきたのである」。

この特集は、「戦争」に限定しない「暴力による傷跡」全般に射程を広げているとも言えるが、最大の国家暴力である「戦争」と「家族」はつながっている。「青っ恥」は、自分と南京大虐殺に係わった「軍人N」が「来孫と高祖伯父という関係」にあったことを知って、「百年の恥、吐き気がする」心境に陥る。加害者の子孫もまた傷を負い続けるのだ。大田の言葉を借りれば、「八十年ぶんのかさぶた」ということか。「おだやかな日常について」では、主人公が出講先のロサンジェルスの大学で「お父さんが韓国系でお母さんが日系」のハナという受講者と出会い、彼女に「（広島の平和記念式典で子どもたちが言った「七十九年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました」に「日常はありましたか？／そこにあった日常はどんなもの？」と問われ、言葉を失う。

加害者は、まさに村田は創作のタイトルにしている「忘却」を意識的・無意識的に図る。「少年ＡＢ」では、主人公が、「国歌斉唱！」の命令を無視するクラスメートを「ムシクン」と呼び、いつしか無視し始め、「持ち主の定まらない声」で追い詰めていった加害を思い起こし、「ムシくんはわれわれのほうだった」と思い出す。

自国の戦没者に対しても、“戦後 80 年”、どのように向き合ってきたのだろうか。「戦争の身体」は、「自らの死がこれからの日本を作っていくはずだと観念して死んでいった人たち・・・の死に対して、八〇年ものあとの時代に生きている私たちは無駄死にさせてしまったと悔いるべきで、犠牲の上に今の平和があるなんて言うことは、まさに彼らをそう思わせて死なせてしまったのと同じ論理に立つことだ」と指摘する。

「ペグマン」は、パレスチナ民衆に対して傍観者の立場にしか立ちえないもどかしさを綴っている。その先にあるかもれないアポリアを、「＜内海＞の声は聴こえるか」は、「支援者が、被害者に対して、加害者、救済者、傍観者のような立場になってしまうこともある。そして巻き込まれ過ぎると、感情が疲弊、麻痺していって、燃え尽きてしまう」と指摘する。僕が二十歳前後だった 1980 年前後、“血債論”を真摯に受け止め「燃え尽き」、消えていった先輩、同輩、後輩を少なからず見てきた。ガザ虐殺戦争反対の声をあげるＺ世代の若者を見る時、その二の舞に陥りはしないかと私は胸を詰まらされるのだが・・・。



肝心の鼎談に触れる紙数が尽きた。風船爆弾づくりに動員された女学生の話から鼎談は始まる。当事者だった小岩昌子さんも亡くなってしまった。もっとお話を聞いておけばよかったと悔いるばかりだ。自分が若い頃にいろいろ学ばせてもらった加納美紀代さんの仕事に若い人たちも刺激を受け、引き継いでいるんだと知り、嬉しかった。ロシアやウクライナの戦争に即して傷跡の語り・語りがたさといったことが多々紹介されており、自分の「戦争文学」イメージの“一国主義”的狭さを思い知らされた。鼎談だけでもご一読を！　　（文責:池田）

【文化欄　反戦歌謡考④】フジロックで感じたこと･･･



練馬アクションのニュースに、音楽のこと書いて・・・と言われ、困ったなあと思いつつ、排外主義と露骨な軍拡を唱える政党や候補者が票を集めた東京都議選と参議院選挙、その一週後に参加した「フジロック」で感じたことを少し書いてみたいと思います。

数万単位の音楽フェスは日本でも定着してきましたが、フジロックは「平和」「多様性」「環境問題」など、主催者側のメッセージがはっきりしている数少ないフェスだと思います。

2015 年の安保法制をめぐる夏の翌年のフジロックには「SEALDs（シールズ）」の中心メンバーだった奥田愛基さんが出演して、「音楽に政治を持ち込むな」みたいな意見と、フジロック側のメッセージを擁護する意見とのやりとりがありました。

その後もフジロックには沖縄県知事の玉城デニーさんが出演するなど、フェス全体の中ではとても少数派ではあるけどしっかりした姿勢は貫いてきていると思います。

国会前などの音響やステージづくりではおなじみになった”レーベン企画”の元代表であった大久保青志さんなどがずっとコーディネイトしている、反核兵器・反原発を柱とし、バイオ・ディーゼルでステージを運営する「アトミック・カフェ」や「NGO ビレッジ」はいちばんフジロックらしい場だと思います。苗場の地元のみなさんたちも参画する、「ごみゼロキャンペーン」「フジロックの森プロジェクト」→「世界一クリーンなフェス」スローガンなどが挙げられます。

出演者側にもそうしたメッセージをきちんと受け止めて演奏しようとする姿勢があるのもフジロックっぽいと思います。

甲本ヒロト（元ブルーハーツ→クロマニヨンズ）が初日のステージで「世の中がどんどん壊れていくのはなんでか分かるか？」と叫んだことはネットニュースでも報じられましたが、DYGL の秋山信樹は「あらゆる差別と、あらゆる区別と、あらゆる構造的差別、あらゆる植民地主義に反対します」。スペインでバスクの独立を掲げて活動してきたフェルミン・ムルグサは「Free Free Palestine！」とステージからよびかけました。

ブラフマンというバンドは、福島の原発事故の被災者の写真とインタビューコメントを添えて大画面のスクリーン映像に写していました。

メインステージでは観客席でパレスチナの旗やオーストラリア先住民アボリジニの旗が振られていました。

参院選の直後だけにとてもうれしいフジロックでした。

ただし、「ROCK IN JAPAN」や「サマーソニック」など都市型のフェスに比べ、苗場の山奥でチケット代も高いフジロックの観客の年齢層は一見して高いです。

若いお客さんはアジアから参加者が多いように感じます。

フジロックはそもそもイギリスの、世界最大級のフェス「グラストンベリー」フェスの日本版を目指したといわれています。

当の「グラストンベリー」フェスはCND（Campaign for Nuclear Disarmament/核廃絶キャンペーン）と連携して、資金集めのために始まったといわれています。

そういう意味でもフジロックの初心はかわらないでほしいなと思います。

反面、ロックフェスは機材やステージの大型化とともに大規模化してしまいました。

手作り感のある小さなフェスもまだまだあるものの、かつて開催されていた”フリーコンサート”や、新宿駅西口のフォークゲリラなどのように誰でも参加できるものではなくなってしまいました。

ロックフェスに参加するのは体力ももちろんですが、経済的にもかなり敷居が高くなってしまいました。

いま、憲法集会や原発の全国集会などでオープニングアクトが演奏されていますが、本集会前の前座のような扱いは否めず、デモの送り出しの演奏もデモ隊の中で歌をいっしょに口づさむ人はいません。

闘争の現場でいつも歌があるのは辺野古の座り込みくらいかもしれません。　（文責:宮下智行）

【科学哲学への招待④】

〔編集者より〕
「科学」に係わる事柄が社会的争点になると、しばしば「科学的か、科学的でないか」という二項対立的な論議に陥りがちだ。コロナ・ワクチンについての論争は、その典型であろう。その背景には、“科学絶対的真理”という素朴な近代科学イメージに基づいた“科学信仰”があるように思う。スピリチュアルに走る人から「科学は絶対的に正しいわけではないのよ」と絶叫されたことがあるが、それも“科学信仰”の裏返しでしかない。だが、前号の<3 分で呼んでわかったような気になる「量子力学」>解説にもあるように、現代科学においては“確率論的確からしさ”が前提とされている。近代科学イメージでは現代科学はとらえられないのだ。そこで今回は、近代科学の両輪とされてきた帰納法・演繹法、仮説－実験―反証などを巡る 20 世紀の論争を紹介してもらい、現代の科学理論が近代科学をどう捉え返してきたかを解説してもらった。

トーマス・クーン 著『科学革命の構造』（中山茂訳、1971 年、みすず書房）

反戦歌謡考④を書いてくださった宮下さん、ありがとうございました。「フジロックに行った」というので、『入隊したらさぁ大変！自衛隊　練馬パネル展』のときに、「宮ちゃんも何か書いてよー」と池田編集長と私がお願いして、今回は私が「誌面DJ」をお休みいただきました。

それから今回は、峰お姉ちゃんもありがとう♡念願の「姉妹同時投稿」♪

で、科学哲学のコーナーですが…



Web 版第 4 号で『開かれた社会とその敵　第一部　プラトンの呪文』をご紹介した際に、カール・R・ポパーについて「科学的仮説の必要条件として反証可能性を提起した」と言及しましたが、今回は「ポパーと対立する科学の方法に関する説明」を提起したトーマス・クーン(1922 年 7 月 18 日－1996 年 6 月 17 日)の『科学革命の構造』をご紹介することにします。Web 版第 4 号ではポパーの「反証可能性」について何も解説していなかったので、まずはそこから…(池田編集長が「また長くなるでしょう」という顔をしましたが、ポパーVS クーンの論争をわかっていないと、この本の面白さは半減してしまうので）。

日常生活では「一昨日、常連客の八木さんが藍苑に来た」「昨日、八木さんが藍苑に来た」「今日、八木さんが藍苑に来た」…だから「明日も多分、八木さんが藍苑に来る」というように帰納的な推論をしますが、明日は八木さんが栄養失調のために救急車で病院に運ばれて藍苑には来ないかもしれないので、帰納的方法では「多分」という推論しかできないという限界があります。科学においても「過去に成立していた規則性を観察して未来の規則性を期待する」という帰納法は論理的に妥当でなく、科学者は演繹的推論をしているのであって帰納法を使わないと主張したのがポパーです。「すべての藍苑常連客は品格がある」という大前提と「嘉藤ちゃんは藍苑常連客である」という小前提から「嘉藤ちゃんは品格がある」という結論を導出する「アリストテレスの三段論法」や、僅かな公理を前提として多くの定理を導出する「ユークリッド幾何学」が演繹的推論の代表例で、前提が真であれば妥当な推論から真である結論しか演繹されませんが、前提に含まれているもの以上のことを結論は主張できないのが演繹的推論の特徴です。科学者は仮説を立て、仮説から演繹し、実験によって演繹結果についてテストをして、仮説を立て直すということを繰り返しており、この実験による「反証可能性」があることが科学的仮説の必要条件であるというのがポパーの見解です。ポパーによれば、ニュートン力学はマイケルソン・モーリーの実験（1887 年）によるテストに失敗し、その実験結果を正しく予測する相対性理論に置き換えられた、ということになります。

このポパーの見解に対して、実際の科学史はそのような推測と反駁のパターンに従っていないと主張したのがクーンです。クーンはハーバード大学在学中に科学史・科学哲学も学びつつ、1949 年に物理学で博士号を受けており、現場の科学研究者の観点から科学史を捉え直し、1962 年『科学革命の構造』の原書を出版し、「パラダイム」という概念を提唱しました。クーンは科学研究の通常の状態を「通常科学」と呼び、「通常科学」はその領域の研究者が共有する理論や実験の装置、研究を遂行する指針などを含む「パラダイム」に従って行われるパズル解きのようなものであるとします。その状態では、実験の失敗は「パラダイム」の誤りではなく実験者の失敗とされますが、それまでの「パラダイム」の理論を僅かに修正するだけでは説明できず処理できない状態になると、「通常科学」には「危機」が訪れることになります。ただ、科学は「パラダイム」なしには遂行できないため、新しい「パラダイム」が現れない限りそれまでの「パラダイム」は放棄されず、新しい「パラダイム」が確立されるという「革命」が起きたら新しい「通常科学」が誕生する、というのがクーンの科学史観です。

ですが…クーンの「パラダイム」の概念は 1965 年の学術会議で当時主流のポパー派から袋叩きにあうことになり、ポパー派への反論を主目的としたと思われる「補章　－　一九六九年」を付けて 1970 年に出版されたのが本書ということになります。クーンが 1969 年には「パラダイム」という概念をどう扱うことになるか…気になる方は読んでみてください。論争の歴史として見ると科学史も面白いですね。学問・学術研究の世界も、壁で分離されることなく、開かれた論争の場でありますように。　（文責:佐藤えり）

〔編集者付記〕ポパーは、反証不可能な仮説に基づくという理由でマルクス主義と精神分析学を似非科学とみなした…といった話は佐藤さんではなく、マルクス主義者であったことはなくともその文化圏の端っくれで自己形成した者の課題なのだろうが、手に余る。そもそもマルクス主義に限らず、社会科学の対象領域で反証可能性を有する仮説が立てられるのだろうか。「ずっと株価が上昇してきたから明日も上昇するだろう」といった帰納的推論はあてにならないが、新自由主義理論から演繹されたトリクルダウン仮説が破綻しても新自由主義が信奉され続け、近代経済学の“常識”的理論から演繹しても暴落するはずの実体経済とあまりに乖離した株価が高水準で維持されたり、社会科学の中でも最も科学的といわれる経済学の対象域だけをとっても、そもそも反証可能性と社会科学は無縁であるかのようだ。それを補完するかのように、一時、非合理的選択行動を分析する「行動経済学」が流行ったが、ポパーに言わせれば似非科学である心理学との合体というところだろう。このようにこれまでの理論では説明不能な事態が起きた時に持ち出される用語の一つが、佐藤さんが紹介している「パラダイム」だ。「冷戦が終わり、国際政治の枠組みにパラダイム・チェンジが起きている」とか言われたものだ。近年でいえば、「中国の台頭とトランプの“アメリカン・ファースト”で…」といったところだ。自然科学用語と社会科学用語は、相互に借用し合いながら形成されてきた。厳密な（少なくともそれを目指す）科学的用語とは異なり、社会科学用語に翻訳されると新たな意味やイメージが付与され、比喩的用法が無限定に広がっていったりする。今後、読書案内的な論考だけではなく、そうした観点から、「生物学は自然科学なのでしょうか」（仮）といったテーマでの論考を寄せてもらうつもりだ。



【編集後記】

峰さん、宮下さん、國島さん、堀内さん、原稿をお書きくださりありがとうございました。今後も、書き手を増やしたいと思っています。今号も上手く特集的な組み立てができませんでしたが、そうしたことを含め、改善に努めていきたいと思っています。編集会議は毎月第1火曜日（次回は 10 月 7 日）19:00in 藍苑です。詳しくは090-5208－5803（池田）まで。